審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名　　林　和久

本論文は、明治後期から大正期にかけて活躍した近代日本の建築家、野口孫市に関するモノグラフ的研究である。野口孫市については、これまでもいくつかの重要な先行研究のなかで個別的に言及されることはあったものの、野口孫市その人を研究対象として、その人物と作品を正面から扱ったものはなかった。本研究は、野口が残した豊富なスケッチや写真、卒業論文、日記、設計図面などの資料に基づき、野口孫市研究の端緒を開いた学位論文といえる。

本論は、２部構成となっている。第１部「野口孫市の人とその時代」は第１章から第３章で構成され、彼の人物像、建築家としての若年期の活動、住友本店臨時建築部との関係などが論じられる。第２部「野口孫市の建築術」は第４章から第７章で構成され、住友家須磨別邸、中之島図書館、日暮別邸、他の野口の主要作品がとり上げられ、その建築作品分析がなされる。以上に加えて、冒頭の「序章」と末尾の「結章」および「補遺」から、論文全体が構成されている。

「序章」では、明治後期の建築家としての野口孫市を研究することの意義、その研究の方法、論文全体の構成、扱われる史料について論じられた。

「第１章：野口孫市の人物像成立の背景」では、野口孫市の少年期については、彼の姉、野口幽香に関する先行研究を主要な資料としながら、まとめられた。さらに青年期の野口孫市の人的ネットワークについて、彼の日記や写真、豊富なスケッチ資料を用いながら論じられた。

「第２章：建築家への助走」では、大学卒業から住友への入社前までの活動がまとめられた。本章では、野口の卒業論文や、大学院生の頃に描いたと考えられる西洋建築の豊富な透写スケッチなどを資料として用いながら、彼の学生時代の建築に対する関心を具体的に描き出した。さらにその後のいくつかの実施設計および、彼の構造技術に対する関心についても本章のなかで論じられている。

「第３章：住友春翠と住友本店臨時建築部の創設」では、野口がその後半生において勤務することになる住友本店臨時建築部の歴史的背景とその創設につ

いて論じられた。住友本店臨時建築部は1900年6月1日に設立され、野口孫市は技師長として就任した。

第２部の冒頭の章となる「第４章：住友家須磨別邸―日本人にふさわしい洋館を―」では、タイトルのとおり、住友家須磨別邸の作品分析がなされた。特にここでは、第２章の卒業論文の分析で指摘された「日本の気候と日本人の生活習慣に立脚した西洋建築のあり方」という観点から、彼が卒業論文のなかで用いた”Comfort”の概念をもとに、分析が進められた。本章でも豊富な図面資料や写真資料を用いながら、実証的に作品分析が進められた。

「第５章：中之島図書館―場所と幾何学」では、大阪図書館（現在の大阪府立中之島図書館）の作品分析がおこなわれた。特に本章では、都市空間のなかでの場所性の問題と、作品を構成する幾何学の問題、さらに技術と構造の問題について丁寧に論じられている。

「第６章：日暮別邸―簡素であること―」では、住友の銅精錬所が置かれた四に阪島に建設された住友別子工業所接待館（通称、日暮別邸）について論じられた。近代工業の島であり、起伏に富んだ敷地という、特異な環境のなかに建設された日暮別邸について、本章では、その空間構成やディテールに表れる意匠などについて丁寧に論じられた。

「第７章：野口孫市の和風住宅建築」では、ここまでとりあげられてきた西洋風建築ではなく、和風建築の実例として「野口孫市自邸」「平田讓衛邸」「住友家茶臼山本邸」がとり上げられ、論じられた。また本章では、これらの和風建築の建設において野口孫市と強い関係を有していた職人として、大工棟梁・二代目八木甚兵衛と庭師・七代目小川治兵衛についても論じられている。

「結章」では、野口孫市の設計プロセスを４つの階層に分解して理解するモデルを提示することで、本論全体のまとめがなされた。４つの階層とは、第１階層：敷地の持つ「場所性」の理解、第２階層：つくり出された作品の特性や場所の力、第３階層：幾何学的な骨組みや思考モデルなどの図式的思考の抽出、第４階層：建築手法の編集的再構成、である。

「補遺」では、住友本店臨時建築部が、その後のさまざまな改称・改組を経て、現在の株式会社 日建設計へと至ったことが指摘された。

以上のように本論文は、明治後期に活躍した建築家・野口孫市に関する作家論・作品論的研究である。本研究は明治の日本で西洋建築を実現していった辰野金吾などの第一世代に続く第二世代ともいうべき野口孫市が、西洋の建築意匠や建築技術をいかに学び、実現していったのかを明らかにした、丹念な一次資料調査に基づいた研究といえる。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。